

ナルニア国物語

魔術師のおい

4

C・S・ルイス

土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

第4話 ディゴリーとアンドリュー伯父(後編)

アトランティスの
箱には

われわれの世界が
始まった
ばかりのころに
別の世界から
持ちこまれた

あるものが
はいつていたのだ

.....

.....何？

ただの土さ

細かい
乾いた土だ

見た目は
何の変哲もない

なんだ
そんなもののために
一生を費やしたのか
と言うかもしれん

しかし
その土を
さわらぬよう
つらつら眺め

その一粒一粒が
別の世界に
存在したものだと
考えたとき――

いや
別の惑星では
ないぞ

惑星は
われわれの世界の
一部であって

それなりの
距離を進めば
行き着くことができる

そうではなくて
正真正銘
〈別の世界〉

こことは
別の物質界

別の宇宙のことを
言っておるのだ

この宇宙を
永遠にどこまで
進んでいったところで
ぜったいに
到達できない世界

魔法の力を使う以外に
行くことのできない
世界……

いいかね！



わたしには
わかっていた

しかるべき形に
作ることさえ
できれば

その土には
もともと
存在した世界へ

人を引きもどす
力がある
ということを

ホキッ

…しかし
問題は

しかるべき形に作る
という部分だった

これまで
わたしの実験は
すべて失敗だった



何匹かはただ
死んでしまったし

モルモットを使って
やってみたのだが

何匹かは
小さな爆弾のように
飛び散った――

残酷なこと
するんですね



なんでおまえは
そう話の腰を
折るのだ！

モルモットなんぞ
そのために
あるんじゃないか

わたしが自分で
金を出して買った
モルモットだぞ！



どこまで
話したかな？

さてと…

……ああ
そうだ



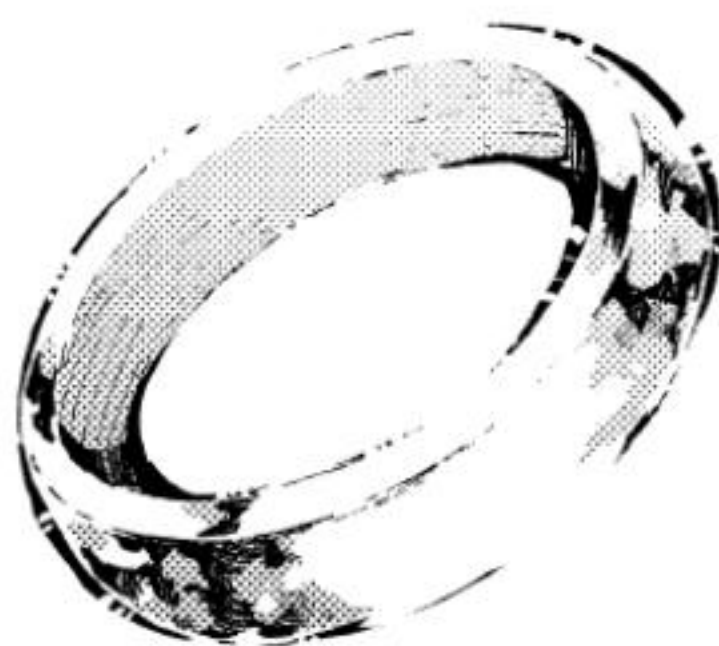


そしてついに

わたしは
指輪を作ることに
成功したのだ



それが
黄色の指輪だ



しかしここで
新しい問題が
もちあがった

黄色い指輪が
それに触れた生き物を
〈別の場所〉へ
送りこむという
点については
かなり確信が持てたのだが

そいつを連れもどして
むこうが
どんな世界だったかを
聞けなけりや
役に立たん

...ということだ

……では
送りこまれた
動物たちは
どうなるんです？

もどつて
こられないんじゃ
とんだ迷惑じゃ
ないですか！

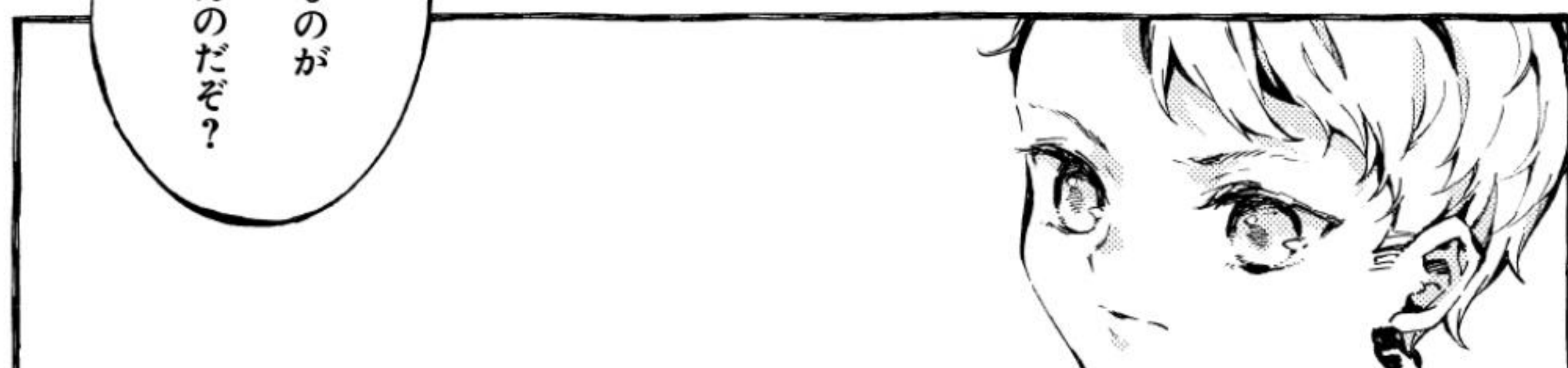
おまえは
どうしてそう
まちがったものの
見方ばかりするのだ

これが
いかに偉大な
実験であるか
わからんのか？

誰かを
〈別の場所〉へ
送りこむ目的は

そこが
どういう世界で
あるかを
知りたいからなのだ

じゃあ
どうして自分で
行かなかったん
ですか？



だからポリーを送りこんだって言うんですか？

あきれてものが
言えませんか

伯父さんだからって
遠慮なんかするもんか

薄汚れた小僧に
そんな口を
きかれてたまるか

そんなのは
卑怯者だ

自分で行くのが
怖いような場所に
女の子を送りこむなんて
卑怯者のすることだ！

黙りなさい！

わたしは偉大な
学者なのだぞ

老練なる
魔術師にして

おまえには
わからんだ

ただいま
実験の最中に
あるのだぞ！

もちろん実験には
実験材料が必要だ

まったく
あきれた小僧だ

この調子じゃ
モルモットを使う前に
本人たちの許可を
得るべきだったなどと
言い出しかねん！

偉大なる叡智に
到達するには
犠牲が必要なのだ

しかしわたしが自分で
行くなどということは
馬鹿馬鹿しくて話にならん

それではまるで
大将をつかまえて

一兵卒のように
戦えというに
等しいではないか

もしわたしが
殺されでもしたら
わたしの生涯を
費やした研究は
どうなるのだ？

つまんない
おしやべりは
やめてください

ポリーを
連れもどして
くれるんですか？

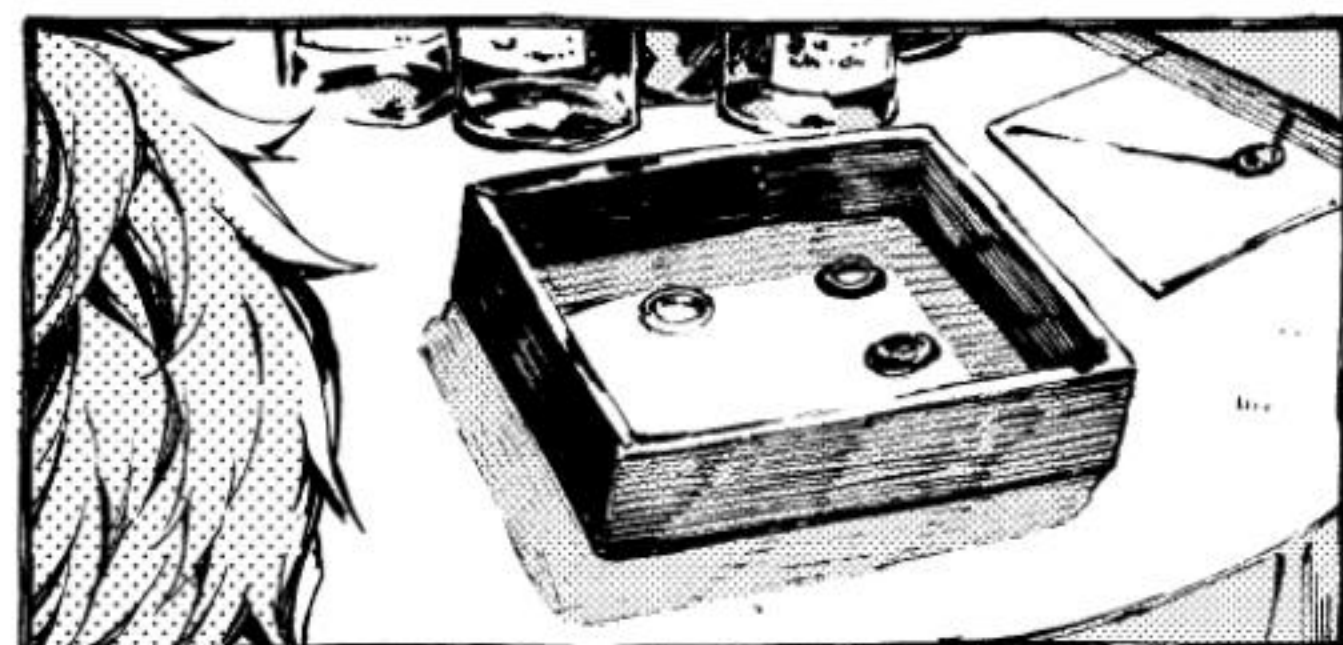
いまその話を
しようとして
おったのに

緑の指輪が

おまえが無礼にも
話の腰を
折ったのではないか

わたしはついに
連れもどす方法を
発見したのだ

この世界へ
引きもどして
くれる



だけどポリーは
緑の指輪を
持ってませんよ？

さよう

それじゃ
もどれないじゃ
ないか！

伯父さんが
ポリーを殺したも
同然だ！



もどれるとも



誰かが
黄色の指輪をつけて
あの子を追いかけて
いけほしい

ひとつは自分が
もどってくるために

そして
緑の指輪を
二つ持っていくのだ

もうひとつは
あの子が
もどってくるために

そういう
わけであるから
デイゴリー

ここでおまえが
臆病風に
吹かれんことを
祈るばかりだ

わが一族の中に

ええと――

難儀をしておられる
レディを助けに行くだけの
義侠心と騎士道精神を
持ち合わせぬ輩がおつては
口惜しいからな

黙れ！

あんたに
その義侠心だの
何だのがあったなら
自分で行ってる
はずだろう

だけど
あんたは自分じゃ
行かないんだ

わかったよ

ぼくが
行くしか
ないようだな

あんたは
人でなしだ

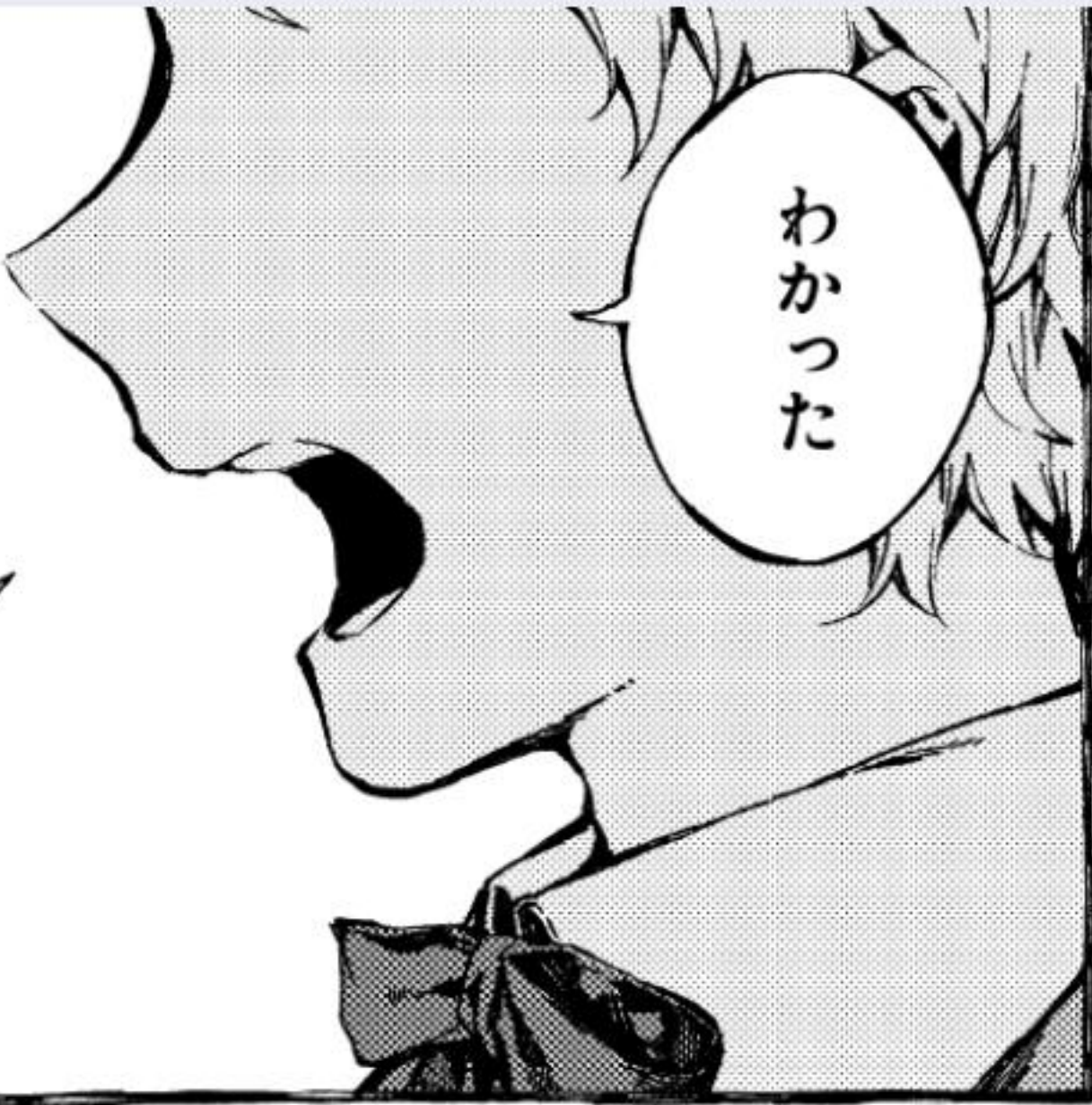
最初っから
計画して
たんだろう

ポリーが
何も知らずに
行ってしまうば

ぼくが
追いかけるしか
なくなるって



もちろん
そうさ



わかった



ぼくが行く



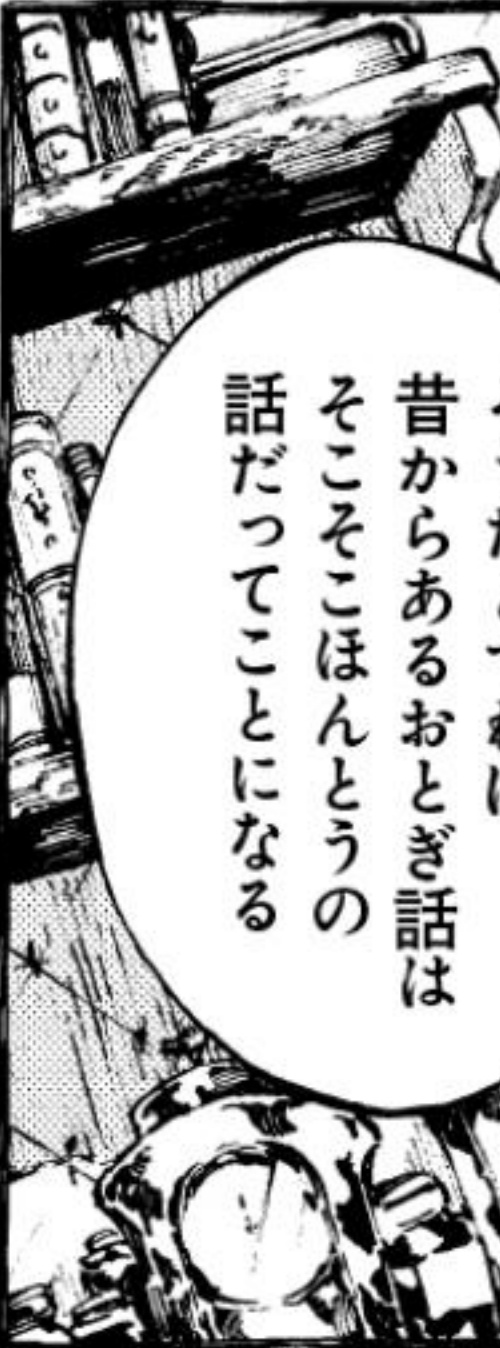
けど
これだけは
先に言っておく



ぼくは
きょうまで
魔術なんて
信じなかった



だけど
それがほんとうに
あるんだって
ことがわかった



そうだとすれば
昔からあるおとぎ話は
そこそこほんとうの
話だってことになる



そんであんたは
そういう話に出てくる
心のねじくれた
残酷な魔術師そのものだ



ぼくが読んだ
おとぎ話に出てくる
悪い魔術師は



どいつも
こいつもみんな
最後にはかならず
懲らしめを受ける
話になったた



あんたも
そうなるに
決まってる



当然の報いさ

いい気味だ



...やれやれ



おまえのように
女ばかりの中で
育ったのでは
無理もない



子どもの
考えそうな
ことだ

迷信を
持ち出したと
いうわけか

わたしの身に
ふりかかる危険まで
心配していただくには
およばないよ
デイゴリーくん



それよりお友だちに
ふりかかる危険を
心配したほうが
いいんじゃないかね？

むこうへ
行ってから
だいぶ時間が
たっている

むこうの世界に
何か危険が
あったとしたら……



手遅れでは
泣くに
泣けないぞ

心にも
ないことを

……けど
こんな無駄話は
もうたくさんだ

どうすれば
いいんですか？

おまえはまず
その短気を
コントロールする
ことを
おぼえる必要があるな

さもないと
大きくなったら
レイティ伯母さんのよう
になってしまうぞ

さて

それでは
よく聞くように

この指輪の魔法は
肌にじかに
触れた場合にしか
働かない

手袋を
はめていれば

こうして指輪を
手に取っても…



ほれ

何も
起こらない



だから
ポケットに
入れておけば
何も起こらない

ただし



言うまでもないが
ポケットに
手をつつこんで
うっかり指輪に
さわらんように

黄色の指輪に
触れた瞬間

おまえは
この世界から
消える

そして
《別の世界》にいるときに
緑の指輪に
触れればおそろく…

もちろんこれは
まだじつさいに
試していないので
あくまでも予想であるが

おまえは
むこうの世界から
消えて
こちらの世界に
ふたたびあらわれる

……と
考えられる



それでは
この緑の指輪を
二つ

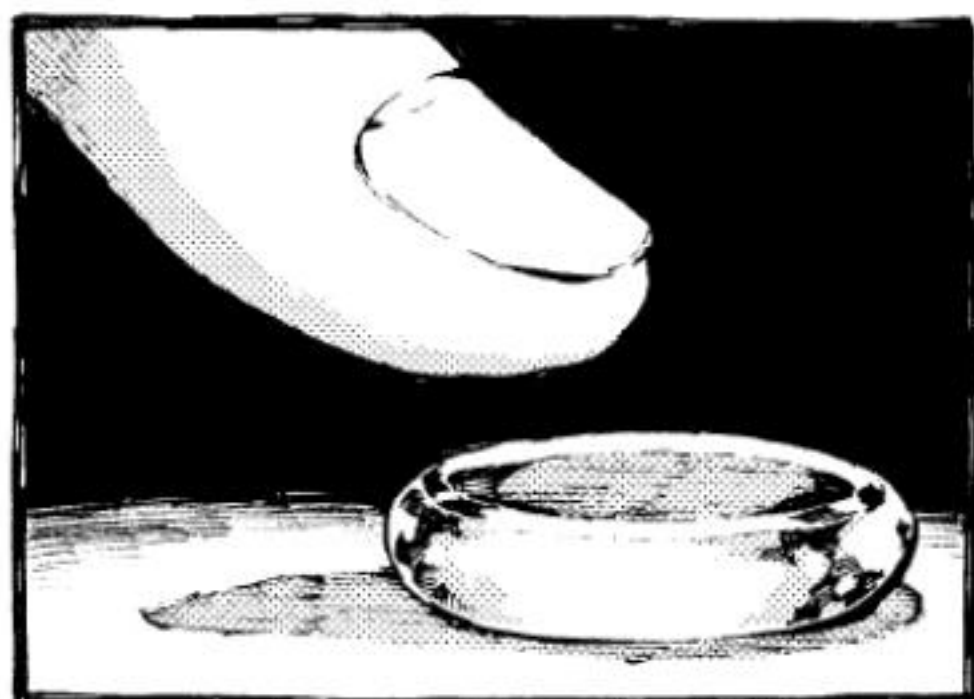
おまえの
右のポケットに
入れてやろう

どっちのポケットに
緑色の指輪が
はいつているか
よくおぼえて
おくんだぞ

緑の「み」は
右の「み」だ

一個は
おまえ用

もう一個は
あの女の子用だ





ぼくがどこへ
行ったかって

もしお母さんが
聞いたら?

さっさと行けば
それだけ早く
もどってこられる
ということだ



ああ
いいとも



好きなように
すればいい



わからないん
でしょう?

だって
ほんとうに
もどって
こられるかどうか

階下へ行つて
昼ごはんを
食べておいで

あの子が
〈別の世界〉で
野生の動物に
食い殺されようが

飢え死に
しようが

溺れ死のうが

二度ともどつて
これなくなろうが
それでいいなら

わたしにとっては
どれも同じことだ

お茶の時間の前にでも
プラマーさんの
奥さんのところへ行つて
知らせてあげるといいよ

お嬢さんには
二度と
会えないでしょう

……とな

おまえが
指輪をつける
勇気がない
ばつかりに
気の毒なことだ

くそっ！

ぼくの背が
高かったら

あんたの頭を
ぶんなぐつて
やるところだ！





ほかに
選択肢は
ないのだ

——その思いは

その後もずっと
変わることは
なかった